翻　訳

中国西北農村地域における恋愛と結婚

徐 安 琪 著
東　美晴・呂 楠 訳

甘粛省は黄河中流域にあり，黄土高原，チベット高原と内モンゴル草原の境界上に位置している。ここは中国北西部の中でも社会生活と経済水準が相対的に低い地域である。歴史上，甘粛省は全国でも経済開発が最も早い地域の一つであり（特に農業の開墾が早い），中華文明発祥の地とされる重要な地域でもある。隋，唐の時代には，「天下の裕福者は陂佑に及ばず」と称されるほど経済活動が盛んであった。当時，世界に名を馳せた「シルクロード」は，中国を西アジア，ヨーロッパ，アフリカなどへとつなげ，政治，経済，文化交流の接点として，甘粛省の農業，手工業，商業の発展を促していた。しかし，明の時代以降，海洋水路の発達に伴って「シルクロード」の利用は廃れた。中国経済の中心地が北西部から南東部に移行するに伴い，甘粛省の経済は次第に衰退した。その上，歴代の封建的な勢力が割拠し，長年に渡る戦乱により，自然破壊が深刻化した結果，甘粛省は全国有数の貧困地域となった。中華人民共和国設立後は，とりわけ共産党全国第11期第三回届人民代表大会の開催以降，人々は物質的困窮状態から脱出するようになり，生活の質も飛躍的な変化を遂げた。相まって，伝統的な価値観，道徳理念，風俗習慣における変化が見られ始めた。こうした経済生活と文化形態の変化は，人々の行動様式（結婚生活を含む）に影響を及ぼした。しかし，甘粛省は自然条件に恵まれず，高い山と渓谷に遮断されているため，交通と情報伝達の不便をもたらしている。地元の農民は恋愛と結婚に関して伝統的文化規範を依然保持している。貧困である上に伝統的価値観念に縛られていたため，「古き伝統」が根強く生きている地域でもある。

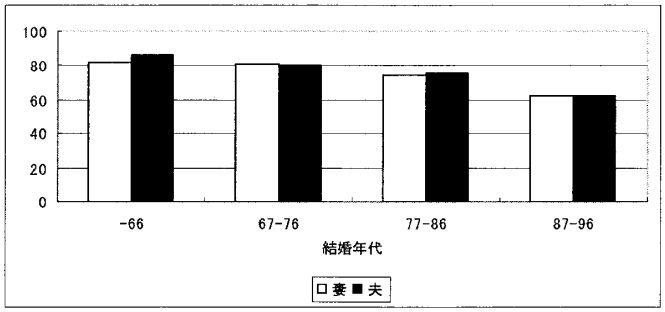
1　配偶者選択―誰が結婚を取り決めるのか

結婚の決定における主体性は，婚姻の質を図る第一要件である。この調査で明らかになったことは，年を経るごとに，西北地域の農民の結婚における主体性が徐々に高まってきたことである。だが，経済発展の立ち遅れと伝統的観念に影響に左右され，親の取

り決め「父母之命，媒妁之言」は依然，重要な働きをしている。従って，未婚男女は恋愛から結婚に至るまで，主体性を持って自由に相手を選択していると言えず，両親や仲人によって結ばれたことが多数見られる。

「男大当婚，女大当嫁」（男女は一定の年齢になると成婚すべきである）は，甘粛農村では昔ながらの規範である。中年以上の人は未だに「不孝有三，無後為大」（親不孝には三つがあり，後継ぎなしは一番である）という観念に従っている。結婚後しばらくは大家族の生活が維持できる男性側の親にとって，息子の結婚は家の後継ぎを得るだけでなく，大家族にとっての働き手を増やす有利な方法である。一方，女性側の親にとっては，「女大不中留」（娘はずっと側におかれない）という観念から，嫁げない娘を抱える親は肩身が狭く，隣近所に嘲笑される。更に，娘は遅かれ早かれ家を出る為，家にいても「ただ飯食い」と見なされる。このような理由から，若い男女が一定の年齢に達すると，本人達は一向に焦っていないのに，親達が早々に子供の結婚相手が捜しに走り回る。家が貧困だから早めに息子にいい嫁を選んでおく（遅ければいい嫁にめぐり合えない可能性がある），家が裕福だからいい嫁を探してやる（遅ければ好い人は先に決められる）のである。一方，女性側は相対的に静的であるが，決して「皇帝的女儿不愁嫁」（皇帝の娘であるから結婚できない心配がない）というわけではない。「待价而沽」（値上がりを待ってから売る）というように，周囲を見ながら状況判断する。更に，子供は誕生する前から親によって縁結びさせられたり，生まれた時点で将来の結婚を決められるような「娃娃亲」もあった。800人の妻の回答者の内，親自身或いは第三者に依頼して娘に結婚相手を紹介したのは72%であった。同じ質問で530人の夫の回答者の内，親が同様に結婚を斡旋した人は全体の74.7%を占めていた。しかし，親の結婚干渉の度合いが当事者の結婚年代と一定の関係を持つという事実は否定できない。それでも，年代の推移に伴って結婚における親の干渉が次第に減少しているとは言え，依然相当な割合を占めている（図１－１）。

図１－１　年代別に見た結婚相手を紹介する親の比率　　単位：%



この調査結果によれば，調査対象者の性別と親の結婚への関心度とは無関係である。農村女性の親は娘の結婚に対して「まったく無関心」は僅か2.7%しかなく，男性の親も全く同じ割合だった。

西北の農村地域では，親によって結婚が取り決められ，後に相手と初めて顔をあわせるケースも多い（中には，結婚当日始めて相手と顔合わせする人もいる）。自分達で知り合った，または第三者の紹介で配偶者と知り合った人は少数である。調査対象の1330人の内（妻或いは夫），60.8%の人は親の取り決めで，26.2%の人は第三者の紹介で結婚した。それに対して自分達で知り合って結婚した人は僅か12.9%に過ぎない。

しかし，結婚した年代が近年になるほど結婚における親の主導権は大幅に低下している。現在親の紹介で知り合ったケースはそう多くはない。にもかかわらず，ここ10年間，依然として３分の１以上を占めており，全く消滅したとは言えない。

これ以外に，調査から分かったことは，親，年長者及び親戚が仲人として重要な役割を果していることである。208人の妻の回答者中，仲人は「親，年長者及び親戚」と答えた人は47.6%であり，全体のトップを占めている。一方，135人の夫の回答者でも，同じ結果が見られた。

表１－１　男女調査対象者の仲人

紹　介　者	男　性		女　性	
	回答数	%	回答数	%
父母・伯叔父母	63	46.7	99	47.6
きょうだい・いとこ	24	17.7	34	16.3
隣人・専門の紹介者	24	17.8	59	28.4
同級生・同僚・友人	15	17.8	16	7.7
合　　計	135	100	208	100

また，以下のことも調査結果から明らかになった。

即ち，女性の学歴は配偶者選択に影響する。女性の場合は学歴が高いほど結婚における親の決定権が低く，自分達で知り合う機会が多い。男性の場合は一定の動きは見られないが，学歴が高いほど親の取り決めが少ないことは，明らかである（表１－２）。

表１－２　学歴別に見た調査対象者が知り合った経路　　単位：%

知り合った経路	学歴							
	小学校未卒		小学校		中学校		高　校	
	夫	妻	夫	妻	夫	妻	夫	妻
自由恋愛（自分で）	13.6	9.9	8.8	11.5	18.0	24.0	12.4	58.3
紹介による	15.6	18.2	20.9	40.1	37.4	46.2	34.8	33.3
父母の取り決め	70.8	71.9	70.3	48.4	44.6	29.8	52.8	8.3
合　計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
回答数（人）	154	527	148	157	139	104	89	12

この他，配偶者を自分で選択する際に，交通が不便なため交際範囲が限られ，居住地が近隣であることも男女が知り合う重要な条件になる。今回の調査によれば，800人の妻の回答者の内，配偶者と自ら知り合ったのは102人で，そのうち相手が近隣の幼馴染だった人は33.3%と，トップを占めている。同様に，530人の夫の回答者の中，自分で相手と知り合ったのが70人であり，その内幼馴染の人は34.3%を占めている。

配偶者選択における主体性は婚姻の自由度を示す重要な指標である。1949年中華人民共和国が設立された後，政府は結婚において主体性を持つよう呼びかけた上，法的にも規定した。そのため，自分で配偶者を選ぶ人の割合は年々上がっている。しかし，経済的貧困及び因習観念の根強さに制約され，結婚における自主性は普及しなかった。今日，西北部の農村地域で，子供の結婚における親の影響及び決定権は依然見られる。

全体的に見ると，80.3%の女性は親によって結婚を取り決められている。19.8%の女性は自分達で決めている。一方，71.8%の男性は親によって結婚を取り決められ，自分で決定したのは僅か28.2%に過ぎない。だが，結婚における主体性は年代とも関係する。調査によれば，近年になるほど，結婚における親の意思決定は男女共に低下し，自己決定の割合が上がっている。

留意すべきことは，配偶者選択をめぐる自己決定の割合に関して，性別によって上昇する幅が異なることである。男性は比較的選択の幅が広く，当事者の結婚に対する自己決定の割合の上昇が裏づけられる。表１－３から，全体的に言えば，「年長者によって決定され，本人が満足」は主流を示している（男性52.5%，女性51.5%）。一方，女性の場合「完全に年長者に決定され，結婚する前にお互い知らない」ケースの割合は大幅に低下したものの，「年長者によって決定され，本人が満足」の結婚比率が上昇している。男性も同じ傾向が見られる。前者のケースは女性同様に低下する傾向があり，後者の上昇率が高く「他人が決定し，自分が満足」よりも「年長者によって決定され，本人が満足」が多数となっている。

表１－３　年代別に見る男女婚姻における主体性　単位：%

結婚における自主性の度合い	1946-66		1967-76		1977-86		1987-96	
父母・伯叔父母が決め、婚前は知らなかった	33.6	43.7	21.6	36.5	11.9	21.9	6.8	8.8
父母・伯叔父母が決め、本人は不満だった	3.6	9.2	4.5	2.6	0.6	3.6	0.8	2.2
父母・伯叔父母が決め、本人も満足だった	47.3	33.8	60.4	49.4	59.7	55.1	40.6	59.2
本人が決め、父母は関与しなかった	1.8	0.7	0.9	0.0	1.7	0.4	2.3	0.9
本人が決め、父母は満足だった	10.0	9.2	8.1	10.3	25.0	17.9	47.4	26.8
本人が決め、父母は不満だった	0.0	0.7	0.0	0.0	0.0	0.7	0.8	0.9
本人が決め、父母は反対した	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	1.3
本人が決め、父母は死去していた	3.6	2.8	4.5	1.1	1.1	0.4	1.5	0.0
合　　計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
回答数（人）	110	142	111	156	176	274	133	238

2　愛情のない人が結ばれた

「愛し合った二人が夫婦になるように」という俗語がある。歴史的にみても現実生活においても，愛情によって結ばれていても結婚できないことから，人々は美しい願いを言葉に託して表現する。しかし，甘粛省の農村では，このような心配はさほど要らない。というのは，甘粛では，別れさせたカップルがいないわけではないが，実際に愛情の深い鴛鴦のようなカップルが少なすぎる。伝統的結婚観によって婚前の接触が制約された為，未婚カップルの婚前の接触は恋愛とは言えず，只の「見合い」に過ぎないのである。更に，婚前の相思相愛の親密さは，映画やテレビのシーンに過ぎないか，または都市生活者の特典であるように思われる。多くの未婚者にとってロマンチックな愛情は夢にも見たことがなく，体験のないことである。

（1）めぐり合えても知らない人である

中華人民共和国が設立されて以降，結婚式の日に始めて対面する夫婦はめったに見られなくなった（貧困な地域を除けば）。多くの人が婚前に相手と接触する機会を設けられ，これによって相互理解が深められるようになった。だが，親の取り決め及び第三者の紹介によって知り合った当事者にとって，この種の接触は見合い程度に留まり，恋愛にまでいたらないのである。

また，面会の場所は田舎の定期市場か，男女どちらかの家（女性側の方が多い）である。多くは親戚，友人，姉妹などが同行するため，衆人の目が光る中でのデートとなり，男女の実質的な交流が行なわれない。そのため，行きも帰りも慌しく，無言のままで終る。尚，男女いずれかの家で面会する時に，双方の親が付き添うため，男女はコミュニケーションが殆ど取れない。女性の父親が男性の母親とのコミュニケーションを通して，将来結婚可能な相性かどうか，健康などを見定めようとする。このような状況であるため，当然当事者双方の理解は限られている。

上記のような形では男女の相互理解が深まるというより，寧ろ同行する親，友人，親戚の実感を通じて相手を理解することになる。調査によれば，回答者の妻が結婚した際に，相手に対する満足度は5.58（「非常に満足である」を7，「非常に不満である」を1とする。以下同様）に達し，夫の妻に対する満足度は5.78に達している。にもかかわらず，婚前における夫婦の相互理解は深いものとは言えない。

夫の長所について妻が結婚前から「よく分かる」または「だいたい分かる」が26.2%で，「あまり分からない」，或いは「全く分からない」が57.8%を占める。夫の短所について妻が結婚前から「よく分かる」または「だいたい分かる」が22.9%で，「分からない」あるいは「全く分からない」が61.4%を占めている。ただ年代が若くなるほど結婚前の妻の夫に対する理解度は高まり，「分からない」の比率下がっている。しかし，妻と夫を比較すると，結婚前の妻は夫の短所についていの理解よりも長所についていの理解の評価が高かった（表2－1）。

表2－1　婚前における妻の夫の長短所についての理解度　　単位：%

妻の婚前の夫の長短所に対する理解の程度	結婚年代							
	46-66		67-76		77-86		87-96	
	長所	短所	長所	短所	長所	短所	長所	短所
よく分かっていた	6.3	6.3	5.1	5.1	5.1	6.6	8.0	7.0
だいたい分かっていた	11.5	9.2	12.2	10.3	20.5	18.7	28.8	22.8
少しは分かっていた	13.4	11.3	14.7	15.4	15.4	15.0	19.0	19.3
あまり分からなかった	25.4	27.5	30.1	30.8	27.8	29.7	27.0	32.9
全くわからなかった	43.7	45.8	37.8	38.5	29.7	30.0	17.3	18.0
合　　計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
回答数（人）	142	142	156	156	273	273	226	226

年代別にみると，結婚前妻の夫の性格への理解は，夫の妻への理解と対応する。ただし，留意点はこのような理解度が，妻より夫の方が明らかに高いということである。

表２－２　婚前における夫の妻への理解度　単位：%

夫の婚前の妻の長短所に対する理解の程度	結婚年代							
	46-66		67-76		77-86		87-96	
	長所	短所	長所	短所	長所	短所	長所	短所
よく分かっていた	6.4	5.5	4.5	4.5	8.0	5.7	5.7	4.5
だいたい分かっていた	18.2	15.5	19.8	17.1	27.3	23.9	45.9	31.6
少しは分かっていた	1.8	11.8	18.0	13.5	16.5	15.9	14.3	23.3
あまり分からなかった	29.1	30.0	27.9	31.5	33.5	35.8	18.8	25.6
全くわからなかった	34.5	37.3	29.7	33.3	14.8	18.8	13.5	15.0
合　計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
回答数（人）	110	110	111	111	176	176	133	133

（２）ロマンチックな愛情は夢に夢見る

メディアが未発達なため，「ロマンチック」という語は多くの農民にとって未知の言葉であり，耳にすらしたことがない言葉である。自由恋愛の経験がある人においても，「ロマンチック」の意味は単に「恋愛することは面白い」という認識に留まっている。また，具体的な「ロマンチック」な行為については，映画やテレビのシーンに過ぎず，現実生活にはありえない，または都市部のことであって農村部では適当でない，などの認識を多分に抱えている。調査回答者中，60.9%の夫婦は婚前に恋愛した経験がないため，ロマンチックな愛情体験がない。800人の妻の回答者中，恋愛経験があり，ロマンチックな恋愛を経験したことがあると思った人は全体の2.0%に過ぎない。更に同様の質問を530人の夫の回答者に聞いた結果，その経験者は僅か4.3%であった。しかし，年齢層が若くなるほど恋愛経験のない人が減少し，代わりに恋愛経験があり，しかもそれがロマンチックなものであったという人が徐々に増えている。ここ十年来，「とてもロマンチック」は30.2%で，「比較的ロマンチック」という人が28.1%に達している（表２－３）。

表２－３　年代別に見る夫婦恋愛のロマンチック度　単位：%

恋愛のロマンチック度	結婚年代							
	46-66		67-76		77-86		87-96	
	夫	妻	夫	妻	夫	妻	夫	妻
とてもロマンチック	0.9	0.0	1.8	0.0	4.5	1.5	0.9	5.3
比較的ロマンチック	3.6	2.8	4.5	4.5	12.5	14.2	29.3	22.8
それほどロマンチックでない	6.4	9.2	15.3	11.5	15.3	13.1	18.8	21.5
全くロマンチックでない	9.1	9.8	3.6	9.0	7.9	10.3	8.3	10.0
恋愛感情はなかった者	80.0	78.2	74.8	75.0	59.7	60.9	34.6	40.4
合　計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
回答数（人）	110	142	111	156	176	274	133	288

甘粛省の農民がロマンチックな恋愛を経験していない理由に，次の三つが考えられる。①多くの結婚は親によって決められたので，ロマンチックな愛情は重要と見なされない。②経済的貧困と環境上の制約が未婚男女の自由恋愛を妨げる。③学歴の低さもロマンチックな恋愛に影響する要因の一つである。

この調査によれば，ロマンチックな恋愛は当事者の学歴と大きく関係している。学歴が高いほど，ロマンチックな体験が高いのである。又その逆も成立する（表２－４）。しかし，今回の回答者は相対的に低学歴であった。例えば婚前における妻の未就学率は65.9%であり，高卒は僅か1.5%しかなかった。

これと対照的に，夫の学歴は相対的に高く，未就学率は29.1%，高卒は16.8%を占めていた。

表２－４　学歴別に見る夫婦のロマンチック度　　単位：%

恋愛のロマンチック度	学歴							
	小学校未卒		小学校		中学校		高　校	
	夫	妻	夫	妻	夫	妻	夫	妻
とてもロマンチック	1.3	0.4	2.7	2.5	7.2	5.8	7.9	33.3
比較的ロマンチック	7.1	7.2	9.5	19.1	20.1	29.8	19.1	25.0
それほどロマンチックでない	12.3	11.2	10.8	17.8	18.7	25.0	16.9	25.0
全くロマンチックでない	8.4	9.3	6.7	12.1	9.4	9.6	3.4	8.4
恋愛感情はなかった者	70.8	71.9	70.3	48.4	44.6	29.8	52.8	8.3
合　　計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
回答数（人）	154	527	148	157	139	104	89	12

（３）婚前の交際

未婚男女の婚前における親密な行為（セックスを含めて）の有無は，男女の親密性及び愛情を確認するための証拠となる。甘粛農村では，未婚男女の交際は制限される（多くの人々に囲まれた定期市場の中，あるいは家族が共にする家での対面している）。その上，「男女授受不亲」(男女は一定の距離を保つべき)の伝統観念に影響され，婚前における親密な行為は少ない。

調査の結果によれば，「婚前親密な交際があった」人は12.7%で，「全くない」が全体の87.3%を占めていた。この状況はここ十年の間に改善されたが，大きな変化はなく，婚前に接触経験のない人は回答者の70.9%を占めていた（表２－５）。

表２－５　年代別に見る夫婦の婚前接触（複数選択）　単位：％

婚前の性的接触	結婚年代				
	46-66	67-76	77-86	87-96	合計
抱き合う程度	2.0	2.2	11.6	29.1	12.6
キス程度	0.4	0.4	4.9	18.3	6.8
性行為	0.4	0.4	0.2	3.0	1.1
親密な行為はなかった	98.0	97.8	88.2	70.9	87.3
合　計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
回答数（人）	252	267	450	361	1330

上記の状況は西北部の農民にも当てはまる（特に貧困村）。男女の愛情体験は極めて限られている。「感情が高まり自分をコントロールできなくなる」というような経験の持ち主は，男性では1.1％で，女性は0.8％である。一方，「互いに知らないので特別な感情はない」と答える人は57.4％，59.0％であった。近年になるほど，夫婦共に「幸せで楽しい，お互いに愛している」，「睦まじく，好感を持つ」人が増えている。また「互いに知らないので，特別な感情はない」というよそよそしい夫婦は減少してきた（表２－６）。

表２－６　婚前にどの程度相手を好きだと感じていたか（年齢別）　単位：％

恋愛感情の深さ	結婚年代							
	46-66		67-76		77-86		87-96	
	夫	妻	夫	妻	夫	妻	夫	妻
制御できないほど相手を思った	0.0	0.0	0.9	0.6	1.1	0.0	2.3	2.2
甘やかで楽しい相思相愛	3.6	3.5	4.5	7.1	9.1	7.3	22.6	15.8
仲睦まじく互いに好感を持った	14.5	16.9	20.7	16.0	29.5	29.9	37.6	37.3
仕方なく結婚した	7.3	7.7	5.4	0.6	3.4	4.7	3.0	3.9
互いに知らず、特に感情はない	74.5	71.9	68.5	75.6	56.8	58.0	34.6	40.8
合　計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
回答数（人）	110	142	111	156	176	247	133	228

また，調査結果から，当事者の愛情体験が学歴と相関関係を示していることが分かった。学歴が中学以上の場合は，婚前「甘やかで楽しい相思相愛」，「感情が高まり自分でコントロールできなくなる」経験を持つ人が18.6％であり，未就学，小学校卒では5.6％だった。「仕方なく結婚した」と回答する小学校卒，中卒以上の人は41.6％で，「互いに知らないので，特別な感情はない」と回答する，未就学及び小学校卒の人は73.7％にも達している。

3「掌柜的」の夫と「家内頭」の妻

甘粛の農村では，夫は「掌柜的」（店主あるいは番頭の意）と呼ばれ，妻を「家内頭」と呼んでいる。この呼称は地域毎に特色があり，家庭内における男女の権力関係を表すとともに夫婦の役割分担意識をはっきりと示している。

（1）夫が家計を管理する

日常の支出にその家の経済活動が表れる。日常の支出が誰によって管理されているのかは，家庭における経済の主導権を測る重要な指標となる。甘粛農村では，夫婦が共に家計を管理する家族が一定の比率を占めているが，全体的には夫が妻より権力を握っている。調査結果によれば，25.2%の夫が夫婦で共に家計管理していることを認め，47.8%は自分が管理していると認識しており，妻が管理しているとした夫は27.0%である。妻の回答では，家計に関する見方がこれとはやや異なるが，夫が絶対的な管理権を握っている点では一致している。

その他に，年齢と学歴が家計の管理と明確な相関関係を示していないことが見て取れた。それでも，家計を共に管理する若い夫婦はやや増え，高学歴の妻が相対的に支配権を握っている。

（2）夫唱婦随の権力モデル

家庭における主役は夫婦の権力関係を測る重要な指標である。調査によれば，家庭内の夫婦の権力関係に対する妻と夫の見方は異なっており，「誰が家庭の主役であるか」の認識に違いが見られる。しかし，全体的にみれば，回答者の多くは夫が家庭の実権を握っていると認めている。夫婦平等の家庭は一定の割合を占めているが，決して主流ではない。妻が家計管理の実権を握るモデルは更に珍しい。家庭では相対的に実権をもっていると思う夫が70.4%を占め，夫婦平等であると思う夫は22.1%，更に妻が実権を握っていると思う夫は僅か7.5%に過ぎない。一方，妻の場合を見ると，夫が家庭の実権を握っていると思う妻が57.9%，夫婦平等であると思う妻が34.1%，妻が実権を握っていると思うのは僅か6.0%である。更に，年齢が低い層の妻は年齢が高い層の妻より，夫婦平等であると思う傾向があり，34.8%となっていた。だが，妻が主役だと思うのは僅か7.4%に過ぎない。

表３－１　年齢別に見る回答者家庭の実権所有者の実態　単位：%

家庭の実権の所有	年齢							
	30歳以下		31-40歳		41-50歳		51歳以上	
	夫	妻	夫	妻	夫	妻	夫	妻
夫	66.1	54.1	74.5	60.3	75.7	66.9	63.3	63.3
ほぼ同じ	23.6	39.7	20.1	33.3	18.4	29.2	27.5	28.7
妻	10.2	6.2	5.4	6.5	5.9	3.9	9.2	7.9
合　計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
回答数（人）	127	290	149	231	136	178	109	101

（３）男が外，女が内という役割分担

伝統的な家庭では，家事労働がほとんど女性によって担われる。調査結果によれば，甘粛省の農村家族では，家事労働の分担は偏っている。家事労働の分担について男女の見方は異なるが，妻が絶対多数を引き受けていることが認められる。また，近年になっても，夫の家事労働の分担量が増えるようには見えない。

表３－２　夫婦の家事分担の状況　単位：%

家事担当者	年齢				
	30歳以下	31-40歳	41-50歳	51歳以上	総　計
主として夫	2.6	1.8	0.6	0.5	1.6
比較的夫が多い	5.0	4.1	3.8	6.7	4.7
ほぼ同じ	9.5	7.8	14.3	11.9	10.9
比較的妻が多い	55.8	56.1	54.5	58.1	55.9
主として妻	27.0	30.2	26.8	22.9	27.2
合　計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
回答数（人）	419	378	314	210	1330

それでは，建国40年以来，男女平等の観念が都市にも農村にも浸透してきた今日において，なぜ甘粛農村の夫婦関係が依然として男尊女卑の伝統モデルに留まっているのだろうか。「資源論」の視点から，回答者の男女の学歴，職業状況，収入レベルなど諸資源の差を分析しながら，家庭における夫婦の権力主従関係の原因を探求する。

①　学歴の男性優位

学歴は夫婦の教育レベルを測る重要な基準である。調査結果から言えば，甘粛農村の既婚男女は学歴が全体的に低いことが分かった。しかし，夫婦の学歴を比較すれば，夫が妻よりも学歴が高く，その格差ははっきり現われている（表３－３）。

表３－３　夫婦の学歴格差　　単位：%

	学歴				
	小学校未卒	小学校	中学校	高　校	合　計
夫	26.4	29.5	29.1	15.0	100（800人）
妻	65.9	19.6	13.0	1.5	100（800人）

夫婦の学歴格差が生じた理由は二つある。①甘粛農村では，男尊女卑の伝統観念が従来強く，「女の子が勉強しても役に立たない」，「字が読めればいい」という考えが一般的である。「女性はいずれ結婚するので，学校に通わせると損である」という考えから，婚前の男女の学歴はアンバランスになっている。②甘粛農村では，成人教育を受ける機会に恵まれず，青少年教育が最終教育となる。こうした背景の下で結婚する男女には，文化資源をめぐる男性優位の基礎が築かれる。

②　性差のある職業構造

家庭における夫婦の職業がそれぞれの資源を測るもう一つ重要な基準である。甘粛農村では，就業率は夫婦間で大きく違わない。調査結果では夫の就業率は99.4%，妻の就業率は98.8%である。ただ，そのうちの兼業で言えば，夫は74.6%，妻は70.3%である。

また，夫婦の職業構造から見れば，夫の業種は妻より広範である。調査から以下の結果が得られた。即ち農業或いは飼育業などを営む夫は79.9%で，妻は99.1%である。一方，農業以外を営む夫は20.1%で，妻は僅か0.8%である（表３－４）。業種で言えば，夫は農業以外に出稼ぎで別の職につく，妻の場合農業以外の兼業は家庭副業，飼育業が多いのである。このような職業構造から夫婦の交際面と情報面に一定の格差が生じるため，夫が相対的に優位であるといえる。

表３－４　夫婦の主要な職業状況　　単位：%

	農　民	労働者	商業ｻｰﾋﾞｽ職	業務・行政職	専門技術職	管理職	その他	合　計
夫	79.9	12.1	2.0	0.6	3.9	1.4	0.1	100.0
妻	99.1	0.6	0.1	0.0	0.0	0.1	0.0	100.0

＊回答数は夫、妻ともに800人

③　夫婦の収入の格差

夫婦の収入は家庭収入の重要な部分を占める。従って，双方の経済力を測る際に，収入の格差に依拠せざるを得ない。甘粛農村では，夫の収入が総体的に妻の収入を上回っている（表２－12）。

表３－５　年代別，学歴別にみる夫婦の収入格差　単位：元

	年齢（歳）				学歴			
	-30	31-40	41-50	51-	未就学	小学	中学	高校
夫	3156.95	3132.12	2701.26	2410.08	2180.47	2849.12	3221.48	3697.17
妻	1677.75	2027.98	1846.94	1455.11	1708.19	1828.82	2156.12	1676.25

統計では以下のような結果となっていた。すなわち，夫の収入は年齢の上昇に伴って減少し，高収入の妻は30代に集中している。また，妻の平均収入は夫の61.5%である。なお，夫婦の収入格差が発生する理由は以下の二点があげられる。

① 夫が体力的に妻に勝るため，農業労働が長時間可能であるため，可算される収入が多く得られる。一方，家事労働は妻が大多数であるため，金銭的な報酬に加算されにくい。

② 夫は妻よりも頻繁に出稼ぎに行き，臨時雇いなどの非農業職によって高賃金を得られる。

また，高学歴の夫は収入が高い。未就学，小卒の年間平均収入が2180元に対し，高卒の年間平均収入は3697元であったことを示しておく。

4 満足を知る夫婦が楽しい

愛情に基づいた夫婦関係は，大多数が良いもの，もしくは比較的良いものと回答している。ところで，愛情のない男女が結ばれた甘粛農村の夫婦関係は全体的にどのような傾向があるのだろうか。相互理解が極めて少ない若い男女が結婚して，果たして自由恋愛のカップルのように相思相愛になるのだろうか。甘粛農村では，夫婦が頼りあい，満足している様子が至るところでしみじみと伝わってくる。調査によれば，多くの人が他の地域と同様に「結婚後に恋愛する」の常道に乗り，他地域とかわらず穏やかで睦まじい生活をし，現状に満足している。

（1）結婚後に理解し始める

親の意志によって結ばれた若い男女が，長年の共同生活を経験する中で，家庭の責任を共に負い，子育てを協力していく。朝夕毎日顔をあわせる中，愛情が芽生え，深まり，やがて頼り合うようになり，満足して生活するようになるのである。

①自己評価が比較的高い夫婦感情

夫婦双方の感情に対する評価は，結婚の質を測る重要な基準の一つでもある。800人の妻の回答中，65.2%の人が夫の愛情を「とても深い」もしくは「比較的深い」と評価する。一方，夫との感情が「薄い」もしくは「破綻している」と回答した人はわずか1.9%である。

ここから，以下のことが指摘できるだろう。すなわち夫婦間の愛情はそれぞれの複雑な結婚生活を裏付けており，同時に結婚継続年数の変数にもなっている。異なる年代の夫婦では，それぞれの生活経歴及び家族構成，機能，個別的な欲求，互酬性が異なるため，夫婦関係及び愛情の中身が違ってくるのである。年齢が若いほど愛情が「とても深い」もしくは「比較的深い」と評価する人が多い。結婚後夫婦が相互理解を深めていく間，配偶者に対する新鮮な感覚を持つからである。また，さらに多数が恋愛に基いた結婚であるため，婚前の愛情が深く，結婚後容易に親密な関係を築いている。しかし，このような親密な関係の比率は高齢者夫婦においては減少する傾向にある。理由は二つあげられる。一つは夫婦間の異質性が日増しに露呈し，夫婦間の揉め事が多発することによって互いに満足度が低下していくことである。もう一つは，年を取るにつれて互いに穏やかな気持で様々な問題（感情問題を含めて）に直面できるようになったからである。そのため，激しい感情表現が減少することも，時には肯定的な回答とみなすことができる。

表４－１　年代別にみる夫婦の愛情に対する自己評価　　単位：％

夫婦間の感情	年齢							
	31歳以下		31-40歳		41-50歳		51歳以上	
	夫	妻	夫	妻	夫	妻	夫	妻
たいへん深い	29.5	22.1	33.3	22.5	24.3	12.9	17.4	13.9
比較的深い	50.4	47.9	42.9	46.8	46.3	44.4	42.2	42.6
一般的	18.6	28.3	21.8	26.8	27.2	39.9	38.5	34.1
浅い，あるいは破綻	1.6	1.7	1.9	3.9	2.2	2.8	1.8	2.0
合　計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
回答数（人）	129	290	148	157	139	104	89	12

上の表において一目瞭然なのは，夫婦の愛情評価が性別及び家庭役割と関連していることである。男女それぞれの愛情に対する欲求と期待が異なるため，加えて女性の家庭での地位が男性より低いため，愛情体験及び評価が必然的に違ってくるのである。すなわち，夫が家庭の実権を握り，かつ個人消費が多いのが，50.2％を占めている。妻はせいぜい14.7％に過ぎない。ご馳走があれば夫を優先する比率が41.4％で，一方妻を優先するのは8.1％である。食べ残しは妻がという比率は51.9％で，夫は7.7％である。また，夫の休み，娯楽時間は多く，36.8％であり，妻は21.9％に過ぎない。従って，結婚の満足度は夫より妻の方が低く，「愛情がとても深い」もしくは「深い」と評価する比率も男性より下回り，「普通」と評価する人が夫より上回っていることが明らかになった。

他に調査結果から明らかになったことは，夫婦の愛情は学歴と関係があることである。

学歴が高いほど夫婦の愛情が「とても深い」もしくは「深い」の比率が高くなっている（表４－２）。

表４－２　学歴別に見る夫婦の愛情に対する自己評価　単位：％

夫婦間の感情	学歴							
	小学校未卒		小学校		中学校		高　校	
	夫	妻	夫	妻	夫	妻	夫	妻
たいへん深い	24.7	16.7	26.4	21.7	31.7	26.0	23.6	33.3
比較的深い	46.8	47.1	43.2	45.2	42.4	43.3	51.7	41.7
一般的	26.0	34.2	28.4	30.6	25.2	26.9	22.5	8.3
浅い，あるいは破綻	2.6	2.1	2.1	2.5	0.7	3.8	2.2	16.6
合　　計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
回答数（人）	154	527	148	157	139	104	89	12

②役割分担の明確さ

夫婦の役割分担が結婚の質を測るもう一つ重要な基準である。都市では「女房は他人の方がいい，息子は身内の方がいい」との流行語がある。これは変化のただ中にある都市家族の夫婦が相互に評価する気持と価値観をある程度を反映している。しかし，甘粛農村では，当事者の評価基準が都市とは随分異なる。彼らにとっては夫も妻も今の相手が最高であると感じる割合が高い。64.5％の女性と69.8％の男性が，現在の配偶者のことを「最も満足できる最高の人で，かけがえのない人である」と答えている。「分からない」，「そうでもない」と答える人は女性24.8％と男性22.6％，否定的な回答をした人は女性10.8％，男性は7.5％であった。

また妻と夫の配偶者に対する評価を見ていくと，「非常に満足している」を７とするならば，配偶者の「能力」を高く評価する一方，「収入」に対する評価は低い。妻あるいは夫が相手に対して「思いやりがある」，「自分を信頼している」，「自分を尊重している」，「理解がある」などの項目では満足度が高い。これらを比較すれば，具体的行為として「思いやりがある」ことが，「信頼」，「尊重」，「理解」などの心理的満足に関する評価を高めていくことがよくわかる（表４－３）。

表４－３　夫婦それぞれの配偶者に対する満足度評価点数　単位：点

	項目					
	能力	収入	信頼	思いやり	尊重	理解
夫	5.32	4.41	5.79	5.89	5.75	5.58
妻	5.35	4.72	5.52	5.39	5.30	5.27

調査結果では，自分の配偶者が「理想的である」もしくは「比較理想的である」と評価する回答者は82.4%を占めている。「普通」と評価する人は12.7%，「あまり理想でない」もしくは「全く理想でない」は僅か4.9%だった。他に次のような結果が出た。自分達で知り合った夫婦の満足度は高く（91.3%），「普通」或いは「理想的でない」との評価は少ない（8.7%）。親が取り決めた結婚については，満足度の高い比率が低く（79.3%），「普通」或いは「理想的でない」と評価する比率は高い（20.7%）。未就学，小学校卒などで「普通」あるいは「理想的でない」と答える人が多く（19.7%），高卒では11.9%である。

（2）望みが低いため衝突が少ない

夫婦生活で衝突は避けて通れないものである。揉め事や衝突のない愛情は夢や神話に過ぎない。ところが，この地域での衝突の発生は夫婦関係の破綻と結婚の危機を伴わない。寧ろ，家庭の共同の利益を基盤とした衝突は，夫婦間の親密度を高めている。甘粛農村では「夫婦が互いに賓客のように尊敬しあう」ことを尊重し，「一度も喧嘩したことがない」ことが愛し合う夫婦の重要な証拠とされている。しかし，農民達が夫婦の団結，一致，協調性だけを認め，衝突，悩み，闘争を否定しているわけではない。反対に，彼らにとって「仲のいい夫婦」の間であっても「舌と歯も闘うように」，夫婦の衝突は自然とされている。800人の回答者中，「一度も喧嘩したことがない」は18.5%，「最近一年間よく喧嘩した」は僅か3.5%，「時々喧嘩する」は15%，「たまに喧嘩する」は18.9%で，全く喧嘩しない人が62.6%に達している。

夫婦喧嘩の理由に関して，家事労働，子供の教育，経済問題が衝突を引き起こす主な理由になっている。652組の夫婦の内，喧嘩の理由が家事労働だったのは72%，子供の教育方法が一致しないのが34.5%，経済問題で揉めたのが31.4%である。

衝突発生後，夫は相手を非難したり，相手にしなくなったり，殴ったりすることによって勢力を示す。一方，妻は泣いたり，相手を無視したり，叱ったりしてうっぷんを晴らす。

また，一部の夫婦は衝突した時に，争いの怒りを家事，家計管理及び子供の問題に移行させている。夫婦喧嘩をきっかけに妻が実家に帰るのがこれまでの印象であった。しかし，事実はそうではない。家の恥を外に知らせたくないとの考えに基いて，農民達は「喧嘩は夫婦間のこと」，「家の中のこと」と見なし，「双方の親や友人，同僚に」言う必要がなく，更に「村や郷の人に仲裁してもらう」には及ばないと考えている。従って，農民は様々な形でうっぷんを晴らしているが，直接の行動には至っていない（表4－4）。

表４－４　夫婦衝突する頻度　単位：％

衝突時に行われた行為	夫			妻		
	何度もある	経験がある	無	何度もある	経験がある	無
ものを投げる	2.5	7.3	90.3	0.8	3.6	95.6
泣く	0.1	1.6	98.3	15.1	42.4	42.5
ふてくされる	6.0	21.9	72.1	9.4	41.8	48.9
罵る	7.5	47.9	44.6	6.1	40.4	53.5
殴る	2.8	23.4	73.9	0.4	6.0	93.6
家事をしない,子供をかまわない	2.3	11.4	86.4	0.5	8.3	91.3
父母に訴える	0.1	6.8	93.3	1.6	16.1	82.3
しばらく実家に帰る	0.0	0.9	99.1	0.6	10.0	89.4
相手方の両親に訴える	0.3	4.5	95.3	1.0	9.5	89.5
同僚、友人に訴える	0.4	7.9	91.8	1.4	14.1	84.5
しばらく同僚、友人宅に泊まる	0.4	1.8	97.9	0.1	2.4	97.5
同衾を拒否する	0.6	6.8	92.6	0.8	3.6	95.6
離婚をほのめかす	1.4	4.9	93.8	1.4	0.8	90.6
村の幹部に調停を依頼する	0.3	0.9	98.9	0.5	2.0	97.5

5　セックス：失笑する認識及び平然たる返答

性生活の満足度は夫婦関係の親密度を測る重要な基準である。性生活は夫婦の生理的な欲求または心理的な欲求を満たす過程であり，その協調性が具体的な行動となって現われる。性生活は私生活の最も隠蔽された部分である。昔の人は「男女の性欲」を「飲食」同様に「人間の欲求」だと本に書いたものの，現実の生活では（特に北西地域の農村）性行為は相変わらず「只可意会，不可言传」(心で悟ることができるが，言葉で伝えることはできない)ことである。更に，「淡性色变」（性行為意を言い出すと顔色が変る）のように，「性」という言葉を口にすることすらタブーとされる。調査をした甘粛省の農村では，郷，鎮の行政幹部にしても協力する調査員にしても，アンケートに「性交」に関する質問項目を目にすると，薄笑いを浮かべ，或いは爆笑して，長い間笑いが止まらなかった。同時に，「ここは都市部より保守的なので，この類の質問には回答が求められない」とか「このような質問が聞けるのか」などの疑問が投げられた。しかし，調査結果は意外であった。調査員や幹部らは「本当に思いもよらなかった」とか「回答者達がまさか言う勇気があるとは」とかの感嘆，疑問を洩らした。回答者も恥ずかしいがりながらも同様な疑問を投げたが，回答することは拒否しなかった。回答者の多くが性に関する必要な知識に欠けており，性生活が夫婦関係に影響することに気づいていない。にもかかわらず，これらの質問に対して，率直で誠意のある平然とした返答をした。

（1）「性的快感」と「新しい風潮」

新しい文化の受け入れが遅いため，甘粛農村（特に辺鄙な地域）では，性的快感という言葉すら知らない，聞いたこともない夫婦が少なくない。調査結果によれば，530人の夫の回答者中，「性的快感」という言葉を知っている人，耳にしたことがある人が33.4%を占めたが，これに対して，800人の妻の回答者中，聞いたことがある人は僅か16.3%で，83.7%の人はまったく無知である。ところで，この言葉を知らない夫婦は，容易に具体的な性行為と結びつけることができない。中には，この言葉を人民公社時代の「農業は大寨に学ぶ」という社会運動や，あるいは社会秩序を整頓するための「経済犯罪を厳粛に打撃する」運動で提唱された「新しい風潮」と間違えて認識した人もいる。この誤解は表現から生じるのではなく，性に関する知識が農村ではめったに言及されず，議論されなかったからである。とはいえ，「性的快感」という言葉の理解に関しては，妻より夫の方が良く知っている。

他にも，この概念に関する知識は回答者の年齢によって異なるということがある。年長の世代ほど，知っている人の回答率が低く，全く知らない，耳にしたことがない人の回答率が増えていく（表５－１）。

表５－１　夫婦の年齢別「性的快感」という語が分かる人の分布状況　単位：%

性的快感について聞いたことがあるか	年齢							
	30歳以下		31-40歳		41-50歳		50歳以上	
	夫	妻	夫	妻	夫	妻	夫	妻
は　い	62.8	27.6	39.2	16.5	16.9	5.1	11.0	3.0
いいえ	37.2	72.4	60.8	83.5	83.1	94.9	89.0	97.0
合　計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
回答数（人）	129	290	156	231	136	178	109	101

調査から他にあきらかになったことは，「性的快感」という言葉をはじめて知った年齢の性別格差のことである。男性の平均年齢は23.19歳で，女性は21.43歳である。しかし，性別を年齢問わず，この言葉を知る者は若い世代ほど高くなる（表５－２）。

表５－２　「性的快感」という語を始めて知った平均年齢　単位：歳

	年齢				
	30歳以下	31-40歳	41-50歳	50歳以上	総　計
夫	21.51	22.90	25.52	31.50	23.19
妻	21.09	21.13	22.56	31.00	21.43

（2）性生活頻度の変化

満足度の高い性生活は性交の頻度と一定の関係を持つ。しかし，性交をどの位の頻度で行うべきかについては，西北の農民は考えたことさえないので，質問の設定が不可能である。ここでは，性交というものは自然発生の生理現象であり，彼達（とりわけ男性）は「欲求があればする」のであり，周期的なものではない。調査によれば，農村の夫婦は平均半月に一回の頻度である。この頻度は回答者の年齢と密接な関係がある。普通，性交の頻度は年齢の上昇に伴って減少していくことが調査からわかった（表５－３）。

表５－３　年齢別性交頻度　　単位：％

性生活の頻度	年齢				
	30歳以下	31-40歳	41-50歳	50歳以上	総　計
１～４日	29.4	0.0	4.5	2.9	16.4
５～７日	41.3	35.9	13.1	6.2	27.5
８～10日	12.9	18.3	17.8	6.7	14.7
11～15日	8.6	10.1	19.1	7.1	11.3
16～30日	4.3	11.9	26.1	17.6	13.8
31～365日	1.4	2.3	10.8	14.3	5.9
無	2.1	2.1	8.6	45.2	10.5
合　計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
回答数（人）	419	387	314	210	1330

この項目の設定期間は「最近」である。ちょうど夏の収穫の農繁期であり，「帰宅してすぐ寝るため，あのようなことはしない」と言うとおり，疲れた夫婦が多い。そのため，性交の頻度が普段より低い。

（3）性生活における夫権

満足度の高い性生活は，夫婦の心身ともに共感を得られる。従って，性生活における夫婦のコミュニケーションの取り方が結婚生活の質を測る基準の一つである。調査によれば，甘粛農村では，性生活において双方が一定の主体性を持つ上，男女平等の比率が高いわりには，夫主導が多い。夫は性生活においてより主導権を持っている。530人の夫の回答者中，妻に要求されたことがある人が61.7％で，一度もない人が38.3％である。一方，797人の妻の回答者中，夫に要求されたことがある人が95.5％で，最近全く要求されなかったのが4.5％に過ぎない。

日常生活の夫婦の勢力差が性交の主導権にも現われている。夫が妻より多く主導権を握っていることが統計結果に現われた。1328人の回答者中（夫と妻），夫が主導的

だと見る人が48.7%，性生活の主導権は回答者の年齢とも関係している。年長者夫婦は若い夫婦よりも夫主導的であるが，若い夫婦はより平等であり，妻主導的である比率が高い（表５－22）。

表５－４　年齢別に見る性生活における夫婦の主導権　　単位：%

性生活の決定権	年齢（歳）				学歴			
	-30	31-40	41-50	51-	未就学	小学	中学	高校
夫	44.6	42.1	52.4	59.3	54.8	45.9	38.7	31.6
ほぼ同じ	47.3	52.2	41.5	36.4	40.1	44.9	54.3	64.4
妻	8.1	5.7	6.1	4.3	5.1	9.2	7.0	4.0
合　計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
回答数（人）	419	378	313	209	579	305	243	101

なお，性生活の主導権は回答者の学歴と一定の関係を示している。学歴が高いほど夫の主導権が弱くなり，夫婦一緒に決定する者が増えていく。

（５）性交前の親密な行為

夫婦の親密な行為を言えば，例えば，寄り添い，抱きしめてキスをしたり，撫でたりすることが，性生活の重要な部分であると同時に，性交前の準備である。性生活において，農村夫婦は親密な行為があったり，なかったりと思われがちである。しかし，調査結果では，1325人の夫婦の内，性交前に親密は行為がある人は63.9%で，ない人は36.1%である。

更に，これはまた年齢と大いに関係することが結果で示された。学歴が高いほど，こういった親密な行為が多い（表５－５）。

表５－５　学歴別に見る性交前夫婦の親密行為　　単位：%

	学歴				
	小学校未卒	小学校	中学校	高　校	合　計
有	54.1	67.3	79.4	83.2	63.9
無	45.9	32.7	20.6	16.8	36.1
合　計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
回答数（人）	679	303	243	101	1325

性交前の親密な行為の持続時間について，正確な時間観念にかける農民は，針測の有無を聞かれると，「多分」，「大体」などの答えに留まる人が少なくない。この行為に対

する男女の生理的，心理的欲求が異なるため，時間に対する夫婦の主観的感情に格差が見られる。大雑把に言うと，農民たちの性交前の親密な行為は大体３～５分間である。

（６）性生活における夫婦の満足度

性生活に対する主観的な感受性はその質を図る重要な指標である。調査結果によれば，501人の夫の性生活満足度は平均4.75で，767人の妻の性生活満足度は平均4.86であった。年齢別に見れば，若い層ほど性生活に対する夫婦の満足度が高い（表５－６）。

表５－６　年齢別に見る性生活に対する夫婦の満足度の平均点　　単位：点

	年齢（歳）				学歴			
	-30	31-40	41-50	51-	未就学	小学	中学	高校
夫	5.26	5.01	4.64	3.70	4.39	4.67	5.07	4.92
妻	5.21	4.90	4.57	4.08	4.72	5.07	5.21	5.00
合計	5.23	4.95	4.60	3.88	4.65	4.88	5.13	4.93

学歴別に見れば，未就学，小卒では満足度が低く，中卒者において妻に対する夫の満足度が一番高い。高卒者が中卒者より満足度が低いのは，期待が高いからだろう。

性生活における夫婦の身体，感情面での感受性は，性生活の調和度を評価する重要な基準の一つである。一般的に，満足度の高い性生活では，互いに親密感が感じられる。一方，満足度の低い性生活では当事者（双方或いは片方）に羞恥，不安，恐怖，怨恨などの不正常な心理を伴う。甘粛農村では，配偶者と性行為に関する感受性について語り合う50歳以上の老人は31.7%であるが，30歳以下の若者ではこの比率が66.6%に達する。しかし，全体的にみれば，互いによくコミュニケーションが取れている人は僅か4.6%に過ぎない。

以上のことは，セックスと言う抽象概念への理解が低いことと，農民夫婦が性生活に快感を体験できないことを意味していない。ほとんどの農民が性生活に性的な快楽感を体験したことがあることが調査結果によって分かった。男女の間で生理的，心理的欲求の満足度が異なるとはいえ，最近の性生活に性的快楽感を得た体験がある夫は81.3%で，こういった体験のない人は18.7%である。一方，「ある」と答える妻は76.8%で，「ない」人が23.2%である（表５－７）。

表５－７　夫婦の性的快楽の体験頻度　単位：％

性　別	性的快感体験の頻度					合　　計
	毎回	よく	時々	たまに	ない	
男　性	11.3	21.9	37.4	10.6	18.7	100.0（529人）
女　性	3.4	12.4	42.6	18.3	23.2	100.0（796人）

また，性的快楽の体験頻度が年齢と関係があることが分かった。年齢が低いほど，こういった体験の頻度が高い（表５－８）。

表５－８　年齢別に見る性的快感の体験頻度　単位：％

性的快感の頻度	年　　齢				
	30歳以下	31-40歳	41-50歳	50歳以上	総　計
毎回ある	8.4	7.5	4.5	4.3	6.6
よくある	23.6	17.6	9.6	8.7	16.2
時々ある	44.6	43.8	37.4	30.9	40.5
たまにある	10.3	13.7	19.8	21.3	15.2
ない	13.1	17.4	28.8	34.8	21.4
合　　計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
回答数（人）	419	386	313	207	1325

さらに，学歴が高いほど，性生活において体験した快感が多くなっている。例えば，未就学，小卒者において毎回もしくは常に体験できる人は15.2％で，高卒者では35.2％である。一方，全く快感体験のない場合は，前者において47.9％であり，後者では19.8％である。

以上の甘粛農民の愛情と結婚に関する記述を通して言えることは，若い男女の自由な交際が地理条件及び生活水準の制約のために，結婚が「親の取り決め」に大きく左右されていながらも，結婚における主体性が徐々に高まっている。

未婚の男女は，婚前のコミュニケーションも理解もかなり少なく，ロマンチックな愛情というのは多くのカップルの場合に，「映画，テレビに演じられた夢の神話」である。純朴で生活要求の低い村民は高い理想の「ロマンチック」と「幸福」を追い求めているわけではない。更に，回答者の男女における自分の感情生活，物質生活に対する評価は大都市の夫婦のそれを上回っている。「家の奥にいる」と呼ばれる女性の家庭における地位は，「掌桓的」の夫の遥か下である。しかし，男主女従の関係で，互いに寄り添い，苦楽を共にする睦まじい仲は，けっして都市部の人の劣っているわけではない。更に，家庭における衝突が少ない。再婚が容易ではない，因習観念が強いと言う理由のため，離婚への意志が低く，「共に白髪まで」添い遂げる傾向がある。

もちろん，男尊女卑の伝統観念は貧困な西北農村では，当たり前のように残存している。こうした環境の下，学歴，職業，収入面における男女間の格差は大きく，そのため夫権支配の強い家庭モデルが作り出されている。「幸福感」の認識は，「物質的な豊かさ」，「口喧嘩しない」，「夫婦喧嘩が少ない」，「夫に殴られない」，「妻が従う」という文脈に留まっている。愛情によって結ばれ，それによって家庭生活を維持する割合は低い。しかし，経済の発展，職業流動の拡大及びマスメディアの影響を受け，農民の結婚観と生活様式は徐々に変化している。今回の調査を例にしてみれば，村の幹部や調査対象者の農民の他，多くの人が，調査項目に新鮮さを感じ，次々にアンケートに答えに来た。また，調査項目を村民に宣伝，教育する教材にし，日常行動の規範にする幹部もいる。一部の回答者が調査を受けて，目から鱗が落ちるように次のような感想を語った。

「夫婦の生活にはこのようなことがあるとは知らなかった。早く教えてもらえば，夫婦生活がもっと面白くなる」

「早く来てくれていれば，調査項目の基準でいい結婚相手が見つけられたかも」

また，次のように咏嘆する夫もいた。

「妻の感情，やり方については今まで考えたことが一度もなかった。今回の調査で気づいたことは，彼女も大変だということであり，これから必ず優しくしてあげる」

このように，近代化の一方で，立ち遅れた内陸地域の農民が，愛情と家庭生活に関して，古い因習を乗り越え，自由で，文明的で，高質の生活に向けてゆっくりと歩んでいくことを信じている。

＊本論は「西北農民的愛情和婚姻」（徐安琪主編『世紀之交中国人的愛情和婚姻』中国社会科学出版社，1997）の抄訳である。